

## 若山牧水日記に見る読書記録（二）

吉岡義信

### はじめに

本誌第9号に延岡中学校時代の読書記録について書いておいたが、今回はその後、明治37年(1904)4月早稲田大学文学部高等予科に入学以降について見てみたい。また今回は、4月に入学して以来、神田の古書店で本を求めたり、休講の際や時には講義をさぼって図書館に通っている記載が目立っているので、あえて取り上げてみることにした。なお前回同様、旧漢字は新漢字に改めている。また、棒線は識別のため筆者が付け、解説を加えたものである。

### 本文および解説

- 4月13日 夕方、眼鏡と書籍買に神田まで行く
- 4月17日 帰りに神田の古本屋をあさりぬ
- 4月19日 朝からの雨にながされて、ねたり起きたり、紅葉全集を繰りひろげぬ
- 4月20日 東京堂あたりの書店より飯田町を通つて帰る
- 4月21日 大橋図書館に行く。夜、縁日なりとて古本屋をひやかす
- 4月23日 夕方、神田に古本をあさる

『紅葉全集』は明治37年(1904)年に、博文館より発行されている。発行月日は第1巻(1月4日)、第2巻(4月18日)、第3巻(5月8日)、第4巻(7月13日)、第5巻(9月16日)、第6巻(12月16日)となっている。12月24日の記述に第6巻を求めたとあるから符合している。

大橋図書館は、明治35年(1902)に博文館主大橋佐平の寄付による財団法人の図書館で、麴町の自邸内に開館した。蔵書は、博文館の出版にかかる図書一切と、各種の叢書の刊行に用いた原本、その後の購入寄贈を加えて8万8千冊余あったが、関東大震災で残らず消失した。中には大橋乙羽、尾崎紅葉等、明治文壇大家の手沢本もあった。

- 5月1日 午後、床をとつて浪六の「川上三吉」を読む
- 5月8日 帰り路神田の例の通りで、直井へ送る可く、古本を求めて三四冊を得たり
- 5月10日 俄の頭痛、終に一日を小説読みくらす
- 5月16日 夜、神田の古本屋をあさる。伊勢物語に、大見より注文の三角教科書をたづねて、得たり
- 5月17日 体操の時間、休んで図書室に金色夜叉を読む
- 5月19日 学校にて図書館に金色夜叉を読む
- 5月26日 大森君を先ず訪ねて、紅葉の「むき玉子」「むらさき」など読み

村上浪六(1865-1944)は泉州堺の生まれ。小説家。代表作は『三日月』、『当世五人男』などがある。

「川上三吉」は『当世五人男』のことである。青木嵩山堂より前編明治29年(1896)12月、後編明治30年(1897)4月に発行されている。これとは別に『当世五人男のうち川上三吉』として、前編明治36年(1903)5月、後編同年8月、続編同年11月に青木嵩山堂より刊行されている。牧水が読んだのは「川上三吉」とあるから36年発行のものかもしれない。川上三吉、倉橋幸三、黒田健次、上田力、吉田雄蔵の5人の書生が共同生活をはじめ、その青年たちの生き方を挿話でつないでいる。

『伊勢物語』は平安時代の歌物語、作者未詳。在原業平らしき男性の一代記風の形で男女の情事を中心に風流な生活を叙した約125の説話からなっている。

『金色夜叉』は、「読売新聞」に明治30年(1897)年1月1日から35年(1902)5月11日まで断続して連載、単行本は前編明治31年(1898)7月、中編明治32年(1899)1月、後編明治33年(1900)1月、続編明治35年(1902)4月、続々編明治36年(1903)6月にそれぞれ春陽堂より発行されている。全集は明治37年(1904)に博文館より全6巻出版されているが、金色夜叉は第6巻に収録されており、この時は単行本であろう。

内容は主人公貫一と許婚の間柄であったお宮は財産に魅惑されて資産家に嫁すことになり、裏切られたとして貫一は熱海の海岸でお宮を蹴倒し行方をくらます。やがて貫一は高利貸しとなり金銭にのみ執着するが、その間いろいろな事があり、お宮も後悔していることを聞き、友人にも忠告されるが、なお貫一はお宮を許そうとはしなかった。ふとしたことから貫一の心も和むようようになり、その貫一に呼びかけるお宮の悲痛な手紙を読むところで中絶している。

尾崎紅葉(1867-1903)は江戸の芝中門前町生まれ。小説家。代表作に『多情多恨』、『金色夜叉』などがある。

『むき玉子』は、「読売新聞」に明治24年(1891)1月11日から3月21日まで2度に分けて連載、単行本としては、明治25年(1892)2月春陽堂発行の『二人女』に所収、全集には明治37年(1904)発行の『紅葉全集』の第2巻に所収されている。内容は画家大久保蘭谿と裸体画のモデル少女お喜代の恋愛を扱ったもので、前編には少女の脱衣に至る心理や情景は巧緻流麗に書きながされている。なお、ゾラのルーゴン・マカール双書の内の1編『作品』(L'œuvre 1886)に基づいて書かれたという指摘もある。

「むらさき」は『紫』のことである。「読売新聞」に明治27年(1894)1月1日から2月16日の間で連載、単行本は同年8月春陽堂より江見水蔭の『琴』を併録して発行、全集では明治37年(1904)5月発行の博文館版『紅葉全集』第3巻に所収されている。内容は何度も医術開業試験に失敗している受験生味木静馬と彼を取巻く老婆、下宿屋の女房等の人情世態を言文一致で書いている。

6月4日 久留米の人北原君といふ人に会へり、歌などよむ人なるらし。近松半二の浄瑠璃を求めき

6月9日 学校で、音読休講、図書館で幽芳の「乳姉妹」前編を読みていたく興を惹けり。夕方、貸本屋より後編をかりしも、あの嬌慢な君江が、罪悪に対する懲罰のあまりに寛なるが

気に食わず、且つ又、気色すぐれざりしかば、熟読もせず、又勉強もせず、怠けぬ、誠にかれ君江は金色夜叉の宮よりも、其犯せる罪、遙に大にしてしかも、宮の美しき悔恨なく、醜骸に醜悪の心を抱いて、醜刃に仕る、憎みても尚ほ余りあり

6月10日 夕方、乳姉妹を読み終る。名だけの味は嗜み出す能はざりしも、とにかくよきよみものなるべし

北原君とは詩人、歌人である北原白秋(1885-1942)のことで、白秋はこの頃射水と号しており、牧水は同級の中林蘇水と「早稲田の三水」と自称していた。

近松半二(1725-1783)は大阪の儒者穂積以貫の子として生まれ、近松に私淑して近松を名乗った。代表作には『本朝二十四孝』、『妹背山婦女庭訓』などがある。

菊池幽芳(1870-1947)は水戸の生まれで、小説家、新聞記者である。代表作には『己が罪』がある。

「乳姉妹」は「大阪毎日新聞」に明治36(1903)年8月24日から12月26日まで連載された。また自ら Bertha M. Clay (1836-1884) の『Dora Thorne』の翻案であることを明かしている。単行本は『乳姉妹：家庭小説』として春陽堂より、前編明治37年(1904)1月、後編明治37年4月に刊行されている。ちなみにクレーの『女より弱き者』は『金色夜叉』の種本として有名である。

内容は、海軍大尉松平昭定(後の侯爵)は平民の女を妻としたため公然と侯爵家に入れず、台湾の勤務地で重病にかかる。妻は看病のため乳呑児であった娘を乳母に預けて台湾に向かうが海難のため死んでしまう。乳母にもひとり娘がおり二人は乳姉妹として成長する。一方松平は侯爵家の相続人となったため、実の娘の行方を捜し続けていた。乳母の娘は、実娘が自分の出生について知らないことをよいことに、替え玉として侯爵家に入る。後に実娘も招かれて邸に入るが、種々の曲折の末、本当の身分が明るみに出るというものである。

7月5日 北原君より、透谷全集を借りぬ、其日記を見て、われもその如くせむと思ひぬ

7月9日 海野君と、午前、大橋図書館に行き、夕方、神田あたりの古本屋をあざりたれど獲る所なし

7月15日 伊勢物語をよむ

7月24日 関君にたのみし「勝いくさ」(文芸倶楽部)文庫、夕方来る、うれし

北村透谷(1868-1894)は小田原の生まれで、文芸評論家、詩人、平和主義運動家である。代表作には『内部生命論』、『楚囚之詩』などがある。『透谷全集』は明治35年(1902)10月に博文館と文芸堂(文友館蔵版、発売は博文館)で刊行されている。

「勝ちいくさ」は明治37年(1904)7月博文館の雑誌『文芸倶楽部』に「勝いくさ」と題する増刊号(7月15日)が刊行されている。「時報十数件」という何本かの小さな雑文記事の他は全て小説、11人の作家が日露戦争の「勝いくさ」について共作している。

8月 9日 金色夜叉を読み泣く

8月 20日 今日もよ様方にて、逍遙の、当世書生氣質を読みてきかせぬ

坪内逍遙(1859-1935)は美濃国加茂郡太田村の生まれで、小説家、劇作家、評論家、翻訳家、教育家である。代表作には『小説神髓』、『桐一葉』などがある。

『当世書生氣質』は明治18年(1885)6月から翌年1月まで晩青堂より刊行、半紙全17冊であった。明治14、5年ごろの東京のある私塾の書生群の生態を『小説神髓』の趣旨に従って写實的に描こうとしたもの。

9月 19日 終日、北原君の室に籠りて、面白からず暮らしぬ。夕方、鏡花の湯島詣など借り来て、喜びぬ。

9月 26日 学校の図書館で、ゆくりなく中林君に会ひぬ

泉鏡花(1873-1939)は石川県金沢市生まれの小説家。代表作には『高野聖』『婦系図』などがある。

『湯島詣』は明治32年(1899)11月春陽堂より刊行されている。内容は主人公の子爵神月梓が、湯島天神参詣の朝、水銭を忘れ数寄屋町の妓蝶吉に救われる。神月は仏蘭西で教育を受けたのを鼻にかげ賢夫人風をふかせる令夫人を捨て蝶吉に走り相愛の仲となるが、蝶吉が神月の子を宿したのを抱え主に墮されて発狂し、最後は二人相擁して大川に身投げするというもの。

10月 2日 後二時より五時まで図書館に籠る

10月 3日 夜、図書館に行つた。春雨の、くもり日、子規の随筆、閑かで面白かつた

10月 9日 ふとんかぶりて、柳浪の「河内屋」を読んで泣く

10月 13日 夜、眉山の「青春怨」を読んで、頭を沈めき

10月 15日 昨日の通り。柳浪の「だんだら染」天外の「相続人」(新小説) 鏡花の「柳小島」(文芸くらぶ) など、とりどりに

10月 20日 抱一庵の『聖人か盜賊か』を読む

春雨は中村吉蔵(1877-1941)のこと、小説家時代の号を春雨という。島根県鹿足郡津和野町生まれの小説家、劇作家、演劇研究家。代表作に『無花果』『剃刀』などがある。

『くもり日』は「新小説」明治37年(1904)7月に掲載されている。内容は医者の娘秋子は女医を目指している女書生である。父が後妻をもらったため幼い弟が不憫で嫁にもいっていない。また後妻との折り合いが悪く父とも衝突していた。そうした中、借金の返済のため借り出した大金を後妻とその密接な関係にあった車夫とに持ち逃げされ、家財産は没収となり長屋住まいになった。しかし、彼女は病気がちな父と幼い弟の面倒をみながら試験に合格するため勉強に励んでいるところで終わっている。

正岡子規(1867-1902)は現・松山市の生まれで、俳人、歌人である。晩年の四大随筆には『松蘿玉液』『墨汁一滴』『病牀六尺』『仰臥漫録』がある。この時、牧水が読んだ随筆がいずれであるかは不明である。

広津柳浪(1861-1928)は肥前長崎村生まれの小説家。代表作には『黒蜥蜴』『落椿』などがある。

『河内屋』は「新小説」明治29年(1896)9月に掲載されている。4人の男女をめぐる家庭の葛藤をあつかった作品で、特にその心理描写や性格描写は精妙をきわめ、心理小説の逸品と称せられる。

川上眉山(1869-1908)は大阪生まれの小説家。代表作には『うらおもて』『観音岩』などがある。

『青春怨』は春陽堂から明治36年(1903)8月に刊行されている。内容は伯爵東條家の嗣子となった男性が夫人に先立たれ、ある夜、若い頃に契りを結び子供も出来ていた松永静のことを夢に見て捜させることにした。彼女は亡くなる前に子である久夫に父が東條家の主であることをうち明ける。久夫は下宿生活を始め、下宿先の幹という娘と恋仲になる。しかし娘は父の借金の形にとられそうになり、久夫はお金を工面しようとするがうまくいかず、父である東條家を尋ねるが下僕に追い返される。たまたま絡まれた酔っぱらいの持っていた金を取り警官に追われ、迷い込んだ家が東條家であった。主は久夫が落としていった母の手紙により子供であることを知り捜させる。下宿先に戻った久夫は幹と二人で逃げお互いの身の不運を嘆き自殺するというものである。

『だんだら染』は『段々染』のことで、明治29年(1896)12月春陽堂より刊行されている。内容は強欲で身勝手な老婆お市と、その母のために養女先から無理に戻され客相手の店に行かされようとする次女お捨と、同じく客相手の店に行っている三女お光、芸者から官吏の夫人となった長女お妻の三人姉妹が、母親の勤める商売に嫌がるお捨を中心にそれぞれ身勝手な母親のためにその人生を翻弄され、その内面の葛藤を描いたものである。最後は母親がコレラで死に、行方知れずのお光を除き元の鞘に収まって世の憂きを忘れることとなる。

小杉天外(1865-1952)は秋田県仙北郡六郷村生まれの小説家。代表作には『はつ姿』『長者星』などがある。

『相続人』は明治37年(1904)10月「新小説」に発表されている。内容は裕福な家に奉公し主人の妾となって娘を生んだお里が、主が亡くなり追い出された。正妻にも息子がいるが、主の遺言には、息子が成人しなかった場合は、娘が相続人になると書いてあった。お里は、たまたま娘の学校帰りに実の母親であることを告げるが、娘は信じようとしなない。

娘が信じてくれれば、あわよくば自分が生母となり裕福な生活が送れるので、娘を捉えようとするところで終わっている。勿論、この間には番頭捨松との逢引や慰謝料をめぐる身内との人間模様が描かれている。

『柳小島』は明治37年9月「文芸倶楽部」第10巻第12号に発表。海軍少尉の夫人が戦死した夫の追福修行のため立寄った猪苗代湖の柳小島で、魚釣の漢子から出征軍人の家族の悲惨さと村長の横暴を耳にして、貧しき人のために包金子を施し、魚釣の漢子の出征の餞とする物語。

原抱一庵(1866-1904)は岩城国郡山生まれの小説家、翻訳家。代表作に『闇中政治家』がある。

『聖人が盗賊か』は、リットン(Edward George Earle Bulwer-Lytton 1803-1873)の『ユージン・アラム』(Eugene Aram)を東京朝日新聞に訳載(明治33年5月15日-11月15日)、明治36年

(1903) 今古堂より刊行されている。また明治 35 年 6 月に雑誌『明星』に「ユージン阿羅 (アラム)」を掲載している。これは『明治翻訳文学全集』に掲載されているが、5 頁しか無く全体像がつかめない。『近代文学研究叢書』によると、主人公ユージン・阿羅について殺人犯か否か明らかにされないが、およそ犯罪者とは縁遠く聖者然として神秘的な雰囲気周囲にただよわせている人物とある。また阿羅とその恋人麻姐 (マデライン) との通俗的なロマンティックな色彩が強いとある。『集英社世界文学事典』のリットンの項目には、『ユージン・アラム』について「犯罪を犯した男の苦悩と恋を描いた」とある。ちなみに「聖人か盗賊か」の題名について、原自身も適当な題名が浮かばず 10 年あまり経過していたが、帰郷した折、父親に話のあらすじを語ったところ、父親が「阿羅は聖人か盗賊か判じ難き人物ならずや」と言ったことによる。

- 11 月 2 日 午後の歴史休みぬ。しかして図書館に
- 11 月 8 日 午より、三時まで図書館に、膝栗毛など読む
- 11 月 10 日 中林君と、図書館に三時まで
- 11 月 14 日 辞書「言海」を求む
- 11 月 15 日 夕方、鏡花の「高野聖」を読む
- 11 月 17 日 逍遙先生の「新曲浦島」を読む
- 11 月 21 日 二時より図書館に、「金色夜叉」を読み、泣きぬ。
- 11 月 25 日 夕方、頭重きに、射水子と図書館へ
- 11 月 30 日 帰路古本屋に、「スペシメンズ」と「不如帰」とを求めつ。夜は、不如帰を読んでいつものやう・。。。。。

『膝栗毛』は『東海道中膝栗毛』のことで、十返舎一九作の滑稽本である。弥次郎兵衛と喜多八の二人が、随所に失敗や滑稽を演じつつ東海道・京・大坂を旅する道中記である。

『言海』は大槻文彦編の国語辞書、明治 8 年(1875)起稿し明治 19 年(1886)に成立。明治 22 年(1889)から 24 年(1891)にかけて 4 分冊で刊行されている。

『高野聖』は明治 33 年(1900) 2 月「新小説」に掲載、高野山から諸国に出る旅僧、すなわち高野聖から若い時に経験した不思議な物語を聞くという形式で書かれており、鏡花の浪漫主義の頂点をなす作品である。

『新曲浦島』は早大出版部より明治 37 年(1904)に刊行、「新楽劇論」(早大出版部 明治 37 年)の具象化を期したが、壮大すぎて実現を困難ならしめた。新舞踊劇論を提唱して、ワーグナーの歌劇、わが国の伝統演劇、音楽、歌曲などを吸収統合した壮大な楽劇

「スペシメンズ」は Sanseido から 1902 年に刊行された『Specimens of the short story』edited with introductions and notes by G.H.Nettleton のことであろうか。

『不如帰』は徳富蘆花(1868-1927)の作品で、「国民新聞」に明治 31 年(1898)11 月 29 日から 32 年(1899) 5 月 24 日まで連載。明治 33 年(1900) 1 月民友社より刊行。川島武男と妻浪子との愛情が封建的な家庭の因習のため破られるという悲劇。

- 12月 2日 ラム、漢文の二つを受けて、あとは図書館に
- 12月 3日 夕方、出て、神楽坂辺に「小泉八雲」と「中央公論」とを求めき、「公論」にはわが歌載れり
- 12月 7日 夜、米光關月の「朝日和」（文芸界十二月）を誦読せり、よく写されたり
- 12月 9日 ラムと漢文を受けて、国文休講のまゝ、図書館に逃げて、紅葉の「換果編」、木下尚江の「火の柱」を垣間見き
- 12月 13日 日本作文を受けてあとは図書館に
- 12月 15日 春陽堂より、紅葉の「浮木丸」鏡花の「通夜物語」及び米古の絵葉書「伊勢物語」を送り来る

小泉八雲(1850-1904) Lafcadio Hearn イギリス人、のち帰化。随筆家、批評家。代表作に『怪談』『知られざる日本の面影』などがある。牧水が求めたものが何であったかは不明である。

米光關月(1874-1915)は下関生まれの小説家。露伴の門下生。「新小説」(明治32年8月、3年9巻)に『生駒山』が当選。『薄墨の松』(明治35年12月 文淵堂)は「大阪毎日新聞」の二等当選作。

「朝日和」は『文芸界』第3巻13号に掲載されている。内容は馬関の芸者里次は持ち前の勝ち気な性分のため、仲間内でも一二を争う位置に昇ったが、その性格ゆえにつまらぬことで情夫と別れ、数年後その情夫と会うが縊りを戻すこともなく、また性格が災いして次第に人気も下落していった様を描いている。

「換果編」は『換葉篇』のことである。明治36年(1903)10月24日、博文館より刊行された。泉鏡花、小栗風葉ら門弟が病床の紅葉に捧げようと意図して編まれた短編集である。

木下尚江(1869-1937)は信州松本生まれ。新聞記者、社会運動家、小説家。代表作に『火の柱』『良人の自白』などがある。

『火の柱』は、「毎日新聞」に明治37年(1904)1月1日から3月20日まで連載、加筆して同年5月平民社より刊行された長編小説。キリスト教社会主義者の篠田長二は、所属する教会の後援者である政商山木に危険視され、圧力により教会を除名される。山木の娘梅子は篠田を慕っており、山木は梅子を海軍の実力者と結婚させようと画策するが成功せず、ますます篠田を憎み政治家をたきつけて警察権を行使し、遂に篠田は檻車の人となる。理想と情熱をこめて資本主義社会の悪を暴露し、社会主義者の闘いを生き生きと描きだしている。

『浮木丸』は「読売新聞」に明治26年(1893)1月1日から同31日まで「三すぢの髪」の題で連載。「三すぢの髪」を改題し、小栗風葉の『世話女房』を併録して明治29年(1896)9月に春陽堂より刊行。明治37年(1904)7月に博文館版『紅葉全集』第4巻に所収されている。当初の題名が『三すぢの髪』とあるように、グリム童話の『金の毛が三本ある鬼』の翻案である。

内容は、貧乏な子宝に恵まれない家に霊夢によって生まれた子供(浮木丸)が、領主の婿になり家督を継ぐことに運命づけられていた。ふとしたことからこのことを知った領主は、再三この子供を殺そうとするが果たせず、黒雲山に住む人食いの山男の金の髪三本を取って来るよう難題をかけた。山

男の妹の手助けで、三本の髪と旅の途中に受けた三つの難問の答えを手に入れた浮木丸は、姫と結ばれるという話である。

『通夜物語』は明治32年(1899)4月7日より5月8日まで「大阪毎日新聞」に連載。明治34年(1901)4月春陽堂より刊行。吉原のお職丁山が情夫の貧乏画家玉川清に達引くため強請りにでかけた家で、主人の通夜と偽られ、持前の伝法肌から刃傷に及ぶという物語である。

12月16日 二時間目より図書館にこもりて、「火の柱」を読み了り、「野分集」とて端唄あつめしをも一見しつ花袋の「重右衛門の最後」春雨の「黒塗馬車」など読み返しぬ

12月18日 掬江の「わかれ路」を読む

12月19日 夜、鏡花の「風流線」を読みぬ

12月20日 原町に白石様をたゝいて紅葉全集をかりて帰る

12月21日 午後は「紅葉全集」読み

12月24日 矢来町あたりの書店に「紅葉全集」第六巻を求めたれど未だ市に上らず

夜、また出て、『金色夜叉』(紅葉全集六の巻)及び登美子、雅子、晶子等の詩集「恋ごろも」と来年の日記など買ひ込み帰りぬ。寝るまでそれ読みて

12月25日 午前中、「金色夜叉」に耽り居り。

12月26日 夜は、「金色夜叉」読み

12月27日 夜、「金色夜叉」よみ

「野分集」は『端唄野分集』のことであろうか。明治26年(1893)に栗本彦七により刊行され、著者は一菜庵主人、和装本文活版となっている。年代的にも牧水が読んだのはこの本かもしれない。

田山花袋(1872-1930)は栃木県邑楽郡館林町生まれの小説家。代表作に『蒲団』『田舎教師』などがある。

『重右衛門の最後』は「アカツキ叢書」第5編として書き下ろされ、明治35年(1902)5月新声社より刊行された中編小説。明治26年(1893)花袋が長野県上水内郡を旅した際に遭遇した事件を素材として書かれた、「野生の少女」を手下に、ひそかに放火をかさねる重右衛門が、ついに村人のリンチにあい水死させられるという物語である。

『黒塗馬車』は明治35年(1902)2月新声社「アカツキ第二」に掲載、華族の子が貧農の乳母を頼って家出し、乳母の子と楽しく暮らすという人間平等の意識を徹底させた作品である。

田口掬江(1875-1943)は秋田県角館町生まれの小説家、劇作家、美術批評家。『別れ路』は明治35年(1902)4月「アカツキ」に掲載。

『風流線』は明治36年(1903)10月24日より翌年3月12日まで「国民新聞」に連載。明治37年(1904)12月春陽堂より刊行。なお、『続風流線』は明治37年5月29日より10月5日まで「国民新聞」に連載されている。テロ集団風流組を率いる哲学者の村岡不二太と彼をとりまく様々な人物が入り乱れて、波瀾万丈、奇々怪々な筋を展開する。



山川登美子(1879-1901)は福井県小浜町生まれの歌人。増田(茅野)雅子(1880-1946)は大阪生まれの歌人。与謝野晶子(1878-1942)は大阪府堺市生まれの歌人、詩人。『恋衣』は3人の合著で、本郷書院より明治38年(1905)1月に刊行されている。牧水が購入したのもこれであろう。刊行年が1月でも既に販売されていたものと思われる。

## おわりに

早稲田大学時代の日記は、ここまでで終わっている。12月24日の記述に来年の日記を買ったとあるので、おそらく存在していたであろうが残念である。全体を通して尾崎紅葉の作品を読んでいるようである。ちょうどこの年から博文館より全集が出版されており、その影響もあるかもしれない。また、紅葉を中心とした川上眉山、広津柳浪といった硯友社の風俗小説的な写実主義の作品も読んでいる。ちょうどこの頃は浪漫主義期に当たっており、泉鏡花、徳富蘆花などの作品や、小杉天外、田山花袋といった自然主義の先駆的作家の作品も読んでいたようである。文学史的には、硯友社の通俗写実主義の落ち着く先が家庭小説(家庭の団欒に供することを直接の目標とする通俗小説)であり、明治30年代に出現しているのであるが、牧水が菊池幽芳や田口掬汀等のこういう小説を読んでいたのも時代的に納得できるのである。

## 参考文献および資料

- 『日本近代文学大事典』(日本近代文学館編 講談社 1984)
- 『紅葉全集』(岩波書店 1993-95) 全12巻 別巻1
- 『日本図書館史』(小野則秋著 玄文社 1976)
- 『泉鏡花事典』(村松定孝編著 有精堂出版 1982)
- 『現代日本文学大事典』(久松潜一ほか編修 明治書院 1968)
- 『近代文学研究叢書』第7巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学光葉会 1957) 尾崎紅葉、原抱一庵
- 『近代文学研究叢書』第9巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学光葉会 1958) 川上眉山
- 『近代文学研究叢書』第29巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学近代文化研究所 1968) 広津柳浪
- 『近代文学研究叢書』第48巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学近代文化研究所 1979) 中村吉蔵
- 『近代文学研究叢書』第51巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学近代文化研究所 1980) 田口掬汀
- 『近代文学研究叢書』第53巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学近代文化研究所 1982) 村上浪六
- 『近代文学研究叢書』第61巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学近代文化研究所

1988) 菊池幽芳

『近代文学研究叢書』第72巻(昭和女子大学近代文学研究室著 昭和女子大学近代文化研究所

1997) 小杉天外

『明治文学全集』19「広津柳浪集」(筑摩書房 1965)の「河内屋」

『明治文学全集』93「明治家庭小説集」(筑摩書房 1969)の菊池幽芳篇「家庭小説乳姉妹」

『文学界』第58巻題8号(2004年8月号)「文学界百年前の今月今夜『文芸倶楽部』が増刊「勝いくさ」号を出す」文・吾八

『集英社世界文学事典』(『世界文学事典』編集委員会編 集英社 2002)

『日本文学史 増訂版』5近代(市古貞次編集責任 學燈社 1990)

『段々染』(広津柳浪著 春陽堂 明治29年) 国立国会図書館近代デジタルライブラリー マイクロフィルム版

『現代日本文学全集9 泉鏡花・徳富蘆花集』(筑摩書房 1967)の泉鏡花「湯島詣」「高野聖」

『日本文学鑑賞辞典 近代編』(吉田精一編 東京堂出版 1960)

『端唄野分集』はNACSIS Webcatの検索による。

『眉山全集 第6巻』(臨川書店 1977 春陽堂明治42年発行の複製版)の「青春怨」

『新小説』(春陽堂 明治37年10月発行)の「相続人」

『新小説』(春陽堂 明治37年7月発行)の「くもり日」

『文芸界』(金港堂書店 明治37年12月発行)の「朝日和」

『明治翻訳文学全集 新聞雑誌編14 リットン集』(大空社 2000)の「ユージン阿羅」

『第貳明星』(臨川書店 1979.11 複製版)第6号(明治35年6月)の「ユージン阿羅」

(よしおか よしのぶ 別府大学附属図書館事務長)